

木村泰子氏「みんながつくる みんなの学校」

— いつもいっしょがあたりまえ —

The school of the people, by the people

—Always together—

(記録者) 大津 尚志*

OTSU, Takashi*

2017年11月14日(火)の16時30分から18時30分まで、木村泰子氏をお招きして大学院教育学専攻主催のセミナーとしての講演会を行うことができた。参加者は大学院生、学部学生、教員を含めて73名であった。

木村泰子氏は、武庫川学院女子短期大学(現・武庫川女子大学短期大学部)を、中学校保健体育および小学校の教員免許を取得されたうえで卒業された。当初は中学校体育科教員になるつもりだったのが、1970年から2015年までの45年間にわたる小学校における教職歴を終えられたのち、現在では全国で講演会や学習会に呼ばれ、多種多様な活動をされておられる¹。なお、記録者である大津はこれまでに学習会に5度ほど参加している。

2006年から2015年の間は、開校されたばかりの大阪市立大空小学校の初代校長としての役割を務められた。「みんなの学校」すなわち学校職員のみならず地域住民や学生ボランティア、保護者、そして子ども自らによって「みんながつくる」学校であり、「すべての子どもの学習権を保障する」ことを目標として掲げている。学校の一年間の様子を取材したものがテレビ放映されたこともあり、また映画としても見るようになるようになっている。

木村氏は「一斉授業」をもっともやっつけられない形態といわれる。本セミナーも、木村氏が参加者に問いかける、参加者とともに考えるというスタイルで行われた。

「一つ目の質問」として参加者に「こんなことを学ぼうという目的をもってきたのか、は○」「なんとなくここにきたのか、は×」、とするとここにいる人はどちらでしょうか、という問いかけを行うことからセミナーははじまった。

続いて「大空には○か×か、△はありません。どうしてでしょうか。」という問いを投げかけられた。「決断をせまる」「はっきりした答えをいえるようになってほしいから」「×以外の答えはすべて○だから」といった答えがフロアからはだされた。木村氏は、自分と同じ発想もあれば、ぜんぜん違う発想がある、ことに気づくことが学びだといわれる。

木村氏は「正解のない問い」があることを常に強調される。「正解がある」ことにはメリットはない。いままで自分がこれまで生きてきたなかで考えることだから「正解はどこにもない」。「正解は？」と問い続ける教師はむしろ邪魔だという。

「△のない理由」にはいろいろな答えがありうるが、大空小学校では、「△があると世の中は生きやすい」と考えている。「△にも○にちかいのか、×にちかいのかを考えることによって、自分の考えを明確にしていく。そのことによって、自分はいかることができる。」というのが、大空には△がないという理由という。ただし、「パス」はある。さらにもう一つ、「手をあげなかった人」ときくことはある。「どうして手をあげられなかったの？」とききたいから、ではなく、「そのとき手を上げられなかった子ども」は2~3人はいるゆえである。ただし、どの子どもが手をあげるかはほぼ毎回違う。

つづいて木村氏の「どんな力を小学校の6年間でつけたいですか」という問いは、参加者は沈黙した。つづけて「いま、なにもいえないのはどうしてか、と続けた。「みんなが自分の考えをいえる必要がある。」それには、「しゃべる子をそだてる」より「なにを言ってもOKという空気をつ

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

くる必要がある。」

つづいて、大空小学校の映像を流した。学校には行けても2時間しかいれないというセイちゃん。学校の外に飛び出すセイちゃんに「おいかけろ」といい、戻ってきたセイちゃん木村校長は「大空小学校をでていく理由は？」などときく。「私はリョウジにセイちゃんをつれもどすようにたのみました。なぜリョウジだったのかを10秒考えてください。」(大空では自分の考えをもつときは、10秒。)
「近くの人と、なぜと考えたかをシェアしてください。」シェアしたあとに、その場でできたグループの意見がさらに全体にシェアされた。

「くくりでものをみる。」のはとても間違った見方であるという。しかし、「障害児」「健常児」というくくりでみるとすれば、セイちゃんは障害児、リョウジは健常児である。健常児が障害児のサポートをしたという場面とみえるシーンであった。

もうひとつのシーンとして、「泣きながら教室をとびだすユヅキ」。事情を察した校長は、マサヤにきいて、「わからん、て書いたらアカン」と言ったということがわかった。校長は、「ユヅキにとってはわからん、が大正解」「ユヅキは小学1・2年生にときに学校にいけなかった。マサヤはユヅキと同じだと思ってはいけない。わかるマサヤはわからないユヅキを助けないといけない。」あの場面は、マサヤがユヅキから学ぶ場面であったと木村氏は指摘する。マサヤは勉強もスポーツもできる子ども、ユヅキは障害児手帳を持っている子どもである。

リョウジとセイ。健常児であるリョウジが障害児であるセイのために健常児であるリョウジがかかわってあげている、というふうに見られる人が多い。間逆であって、あの場面はリョウジがセイに学ぶ機会。セイはとても怖くて教室に入れない。小学4年生になり、担当が高齢の女性にかわり、反抗的な態度をとるようになった、リョウジにとって、「セイが怖いから教室はいれない」「おれと違う」ということを学ぶ場であった。その時から、リョウジは反抗的な態度をとるのを一切やめた。

多くの人は「障害児のことを口には出さないけれど、自分より下と思っている」。木村氏自身も「大空の9年間で変わった、いや子どもたちから変えてもらった。」と言われる。「障害のある子のお世話にする」「健常の子どもについてい

かないといけない」のではない。

「正解をいくつ教えるか」、それが木村氏が教師になったころ、1970年代の日本の教育であった。「追いつけ、追い越せ」の時代に社会に通用する人間を育てるのが当時必要とされた。50年たった今ではそういう時代ではない。小学生が社会で働くようになるのは、10年後。その時代はもっと多様な社会になっている。その多様な力で「生きて働く力」を獲得するのが小学校での学びではないか。「教える先生」では、将来の仕事は人口知能にとられる。「子ども同士の関係性をつなぐ」「子どもが自分の考えをもってなりたい自分になっていく」そのために、大人としての自分を見せる。教えるプロでなく、学びのプロに。学びのプロになるには、誰に一番学ばないといけないか。それは子どもではないか。

「ある子が椅子から離れる」とすれば、「この子どもは、どうして椅子から離れるのかな？」と子どもから学ぶしかない。「主語が子どもになる」とするのであって「主語が自分になる」(「自分はなんとかしなければならぬ」とか)になると子どもは去るか、学級崩壊になるかどちらかである。あばれる子どもがいるのは、今の時代では当たり前。あばれる子どもを「すわらさる」のは手段であって、手段が目的であると安心して学ぶことはできない。

木村氏はまとまった話をされない。その理由は、それでは子どもにとって生きていけないから。目の前にいる子どもが幸せになるためには、ノウハウではできない。体系化した、理論化したような話し方をいつもされない。その木村氏が最後に「ひとつの木村の理屈」として述べられたことがある。「障害は病気ではない、治すものではない」「障害を健常に近づけるために教えるのが特別支援教育ではない。」と。

ダウン症や知的障害を治すことはできない。発達障害といわれている子どもの9割は発達障害ではない。薬できくのは一握り。なぜ発達障害といわれているのか。「先生の指示を聴かない子ども」は発達障害のくりにいれられてしまい、親が呼ばれ医者にみせて「発達障害」といわれる。

「部屋にはいりなさい」といわれて「もっと遊びたい」という子どもに「みんな集団行動をしなければならない」というのが二次障害を生む。

発達障害などという「ひとくくり」にあてはめることが、

二次障害をもたらすこととなる。障害を見るのではなく子どもを見る。そうすれば、あとから「障害」というものを自分が理解することができる。障害とは、「その子のもっているその子らしさ。」である。「その子らしさ」とは、個性。

私たちの仕事は健常に近づける、健常な子に迷惑かけないように、ではなく。障害を長所にかえること、それが仕事。木村氏らがその方法として大空小学校でみつけれられたのは一つ、「障害のある子どもの周囲の子どもを伸ばすこと、育てること」それが、障害のある子どもを育てる。結果とし

て全員が育つことができる。

木村氏の見解が金科玉条のごとく受け取られることは、おそらくご本人も望まれないことであろう。今後さらなる学びを楽しみ、さらなる「学びの専門家」となることが、筆者もふくめた聴講者全員の課題として残っていると思われた。

(本稿の文責はすべて、いち教員として講演に参加した大津尚志にあります。)

¹ 木村泰子氏の著作としては、『みんなの学校』が教えてくれたこと(小学館, 2015年), 『みんなの学校』流自ら学ぶ子の育て方(小学館, 2016年), 『不登校ゼロ, モンスターペアレンツゼロの小学校が育てる 21世紀を生きる力』(水玉舎, 2016年, 出口汪氏と共著)がある。大空小学校の教育実践を対象とする研究論文としては, 小国喜弘・木村泰子・江口怜・高橋沙希・二見総一郎「インクルーシブ教育における実践的思考とその技法 - 大阪市立大空小学校の教育実践を手がかりとして」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻, pp.1-28.がある。